

## ○身を清めて

10月16日、柏原海岸にて射手と馬を清める「潮がけ」を行いました。

海岸まで約10kmという長い道のりを射手の2人と保存会が練り歩きます。

道中、波野小学校・中学校の子どもたちが、沿道から2人を応援しました。

海岸には、国見中学校の生徒たちも駆けつけ、みんなで安全を祈願しました。

## ○いざ、大舞台へ

四十九所神社まで戻ってきた2人は、本番に向け宮籠もりに入りました。

10月17日、ついに迎えた流鏝馬当日。

今年は昨年引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、関係者のみで神事が行われましたが、武者行列の際は、流鏝馬一行の行く先々に、流鏝馬を一目見ようと待つ人たちが、拍手や声援で激励しました。

神事が始まると、静まりかえった馬場を、射手の掛け声と馬の走る音だけが響き渡ります。

練習以上のスピードで走る「流星号」。後射手も必死に追いかけます。

ダンツと大きな音を響かせながら矢を次々と的に命中させ、見事、9本中8本命中という一番縁起の良い結果で締めくくりました。



▲本番直前の2人

## ○奉納を終えて

奉納後、流鏝馬保存会の川野会長は「(結希君の走りは)良かった、一番だね。今年も周りのサポートのおかげですごくいい流鏝馬奉納になった。」と周囲への感謝を述べました。

後射手を務めた晋賀君は、「(結希君は)装束を着た時は緊張していたが、本番はしっかりしていた。」と自身も後射手という大役を終え、ほっとした表情で語りました。

巫女や鎧武者など全校上げて役を務めた国見中学校の生徒たちは、普段と違う結希君の姿に驚きつつ、「今までで一番っこよかった」と誇らしそうに語りました。

父親の竜二さんは「最初は心配したが、弓受けの儀式のときにいつも見ない凛とした表情を見て大丈夫だなと思った。想像以上の結果でとても嬉しい。これをバネにまたいろいろと頑張ってほしい」と語りました。

奉納を終えた結希君は、「目標である8本を達成できてよかった。人前に出ることが苦手だったけど克服できたと思う。」と笑顔を見せました。

一人の少年がたくさんの人のサポートを受けながら、一歩成長し、大きな挑戦を成功させた流鏝馬奉納となりました。



写真提供…石川徳美